

いつまでも忘れないよ

奄美市立名瀬中学校 二年

津畑 つばた
杏朱 あんじゅ

「起きて、夏。今日はお母さんもお父さんも忙しいから、自分でご飯もすませて学校行ってね。じゃあ行ってくるね。」

セミの鳴き声が響く終業式の朝。私は言われた通りに適当にご飯をすませて学校に行った。学校が終わり家に帰ってもまだ母も父もない。しばらくするとお腹が空いてきた。何か食べないと、そう思っている時に『ガチャリ』と玄関の扉が開く音がした。私が玄関に行くといつもと違う顔をしている両親の姿がある。私は普段ならしないけれど、たくさん持っている母の荷物を何個か持ってリビングまで運んだ。私はリビングにあるソファーに静かに座った。しばらく沈黙が続いた後、母が口を開いた。

「お母さんたちね、ずっと病院にいたんだけど…。今朝おばあちゃん、ミチヨさんが息を引き取られたの。」私はおばあちゃんのこと大好き。おばあちゃんとはとても優しいし、私の学校の行事ごとに毎回来てくれて、どんな時でも私を応援してくれる。何よりおばあちゃん

の手料理は格別。何を作っても美味しいけれど、私のお気に入りには舟焼き。私が小さい時に、なんでこんなに美味しく作れるの、とおばあちゃんに聞いたことがある。おばあちゃんは

「おばあちゃんが初めて作った舟焼きを友達に食べてもらったのだけど、その子達が美味しい、美味しいと、とてもほめてくれたの。それからもっと美味しく作れるようになりたいって思ってたずっと練習したのよ。あの子にもう一度食べてもらいたいわ。」と珍しく思い出を語っていた。

私はおばあちゃんが亡くなったことが信じられなくて途方に暮れていた。何もする気が起きなくて、誰にも会わないように毎日海に通った。今日も海に行きおばあちゃんのことを思い出しながら、ガジュマルの作った木陰に座りながら海を見ていた。すると後ろから「君、いつもここにいますよね。」と自転車のカゴに釣り道具をたくさん入れた少年が話しかけてきた。私は何も言わなかった。またあの子が話している。

「僕の名前はまる。何があつたかは分からないけどちょうど釣り道具、予備として一個持ってきたから貸してあげるよ。一緒に釣り、しない。」

私は釣りをしながらまるに自分のこと、そしておばあちゃんのことをはなした。すごい気持ちさがスッキリして誰

かにこの話をしたかったんだな、と思った。突然まるが「僕がおばあちゃんに会わせてあげようか。さあ。僕の手を握って。一緒に飛び込むよ。」

「私怖いの手だよ。」

「じゃあ行くよ。せーの。」

二人が飛び込むと海の中の泡がどんどん増えて私たちは冷たいものに包まれた。

目を開くとそこには見慣れた光景が広がっていた。だけどよく見てみると自分の通っている中学校も、友達の家もない。状況がよく分からなくて歩き回っていると、私と同じぐらいの年だと思う子たちが大人数で遊んでいて、その中の一人が私達に話しかけてきた。

「あなたたち二人なの。私と遊ばない。」

私は

「良いの。ありがとう。私は夏。あなたは。」

「ミチヨ。今から何をして遊ぶ。」

「近くに川があるよね。川で遊ばない。」

と夏が言うと、二人の返事が返ってきた。

「良いね、それ。」

「泳げるし、タナガも取れるから楽しそう。」

私たちは一日中遊んだ。楽しい時間は早く過ぎ、六時のチャイムがなってしまった。私とまるはミチヨと

「バイバイ、また明日ね。」

とお別れをし二人で歩いた。歩いているといつの間にか、もと居た海に戻っていた。私たちが不思議なところに行っている間、時間が止まっていたかのように何もかも動いていなかった。私たちが持っていた釣り道具、近くにあった漁船、そしてこの海浜にある柱時計。私は思わずまるに「どう言うこと。」と聞いた。まるは

「おばあちゃんに会わせるって言っただろ。」

と言った。私はこの出来事をしっかり考えたくて、まると「また明日ね。」そう言っただけで家に帰った。私は疲れていたのか、すぐ眠りについた。

そして次の日も私は海に行き、まると会った。昨日と同じ方法で不思議なところに行ってミチヨと会った。今日はまるが遊ぶ場所を提案してくれた。

「森に行つて遊ばない。」

「良い案ね。」

私とミチヨは口を揃えて言った。森に向かって歩いていく時にミチヨとたくさん話をした。森に着くとまるは、「誰がこのガジュマルの木を一番速く登れるか競争しようよ。」

といい競争した。結果はダントツでまるの勝利。他にもたくさん遊びをしてみんなで疲れ果てていると、ミチヨが

「私の家すぐ近くの。お腹、空いたでしょ。」

次はミチヨの家に向かって歩き出した。本当にミチヨの家はすぐ近くにあつてすぐ着いた。ミチヨも優しいけれどミチヨの両親もとっても優しくて私達を快く受け入れてくれた。ミチヨは私たちに手料理を振る舞ってくれた。いつもは料理をしないらしく、ミチヨの母がレシピを教えていた。前菜、主食、そしてデザート「舟焼き」まで振る舞ってくれた。舟焼きは今日初めて作つたらしく、初めてだとは思えない美味しさだったので、

「この舟焼きとっても美味しいよ。また食べたいな。」
「まるも」

「こんなに美味しい舟焼き、食べたことないよ。とても美味しい。」

「ありがとう。こんなにほめられたことないからとってもうれしいわ。」

私はこの舟焼きを食べて、心のどこかでおばあちゃんを思い出していた。もう時刻は六時を過ぎていて、まるが「そろそろ帰ろうか。」

と言った。私はミチヨに「また会おうね。」と別れを告げてミチヨの家を後にした。まると手を繋ぎながら帰っているうちにもといた海に帰ってきていた。私はまるに「明日も遊ぼう。」

と言うと、まるは

「遊べたら良いな。僕はいつでもガジュマルの上にいる

からね。」

私はその後、何回も何回も海に行つて、ガジュマルを見てまるを探した。だけど、どこを探してもまるはいない。

私はガジュマルを見るたびに思い出す。まるとミチヨのことを。

『いつまでも忘れないよ』